

昭和20年、私の母校千葉師範学校女子部は富士見町にあったが、2回の空襲で校舎を失い、その上非常持出し係だった先輩の尊い命をも散らせてしまった。

従って師範学校の入学式は、異例の7月に行なわれ、亥鼻にあった男子部において男女合同で行なわれた。

私達は防空頭布、非常袋と称する物を常に身につけ敵機来襲を恐れながら男子部の階段教室において教師となるための勉学の第一歩をふみ出した。ところが、授業が始まって、ものの10分もたたぬ間に敵機来襲を告げる警戒警報、続いて空襲警報のサイレンがなり響く。全員、急いで防空壕に飛びこみ、どうか爆弾が落ちないようにと心に念じつつ敵機の遠ざかるのを待つ。

このようにして日に幾度となく壕に飛びこむので恩師に指導された学習はさっぱり定着しない。教科書もうす茶色の粗末な紙質のものだったが、教師になろうという自分の願いは強く何度となくうす暗い壕の中でもノートや教科書を読み返したものだ。

あれは、師範学校入学一週間目の昭和20年7月7日の未明だった。亀井町の姉の家に下宿して亥鼻の男子部まで通学していた私は断続して鳴り響く空襲警報にとび起きた。枕元の防空頭布をしっかりと頭に被り、大豆や、南瓜や西瓜の種を炒った非常食や薬の入った非常袋を肩にかけ大切な教科書の入ったリュックサックを背負って庭にとび出した。寝巻など着て寝ている人は当時いなかったろう。すぐ飛び出せるように常にもんぺと上衣姿のままふとんに入っていたものだった。立ったまま、すわったままでも眠れる訓練をせよとよく恩師にいられていた。当時、登戸小学校長だった義兄は自分の家や家族よりまず学校第一とサイレンと共にとび出して行った。姉は満水にした風呂桶を確かめ、東金の田舎からぽっと出て来て全く千葉の町を知らない私を促して防空壕にとびこもうとした。しかし、家の周辺は、あちこちに焼夷弾が投下されたらしく、あたりはもう火の海で近所の人々の姿は殆どなかった。カーキ色の国民服を着た警防団の男の人達が大声で「早く逃げて下さい」「さあ！早く！」とくり返し叫んだ。しかし気丈な姉は「アメリカの燃やした火をたとえバケツ一杯でも消さなきゃ気がおさまらないよ！綾ちゃん、早くポンプ押し」と狂ったように叫ぶ。ぽつんと焼け残った手押しポンプを姉に言われるままに懸命に押し続けた。こんなことをしていても焼石に水だと思いながらも姉の剣幕にそうせずにはいられなかった。雨がショボ、ショボ降っていたが、焼えさかる火勢には何の役にもたたなかった。私はもう亀井町の焼野ヶ原で焼死するんだと思うと鼻と涙がいっしょになって流れ、心臓はドキドキしていた。しかし、警防団の男の人の怒号にさすがの姉も諦めて、そこから逃がれようとした時、乳呑児を背負い両手に風呂敷包みをかかえた女の人が「この子をお願いします」と5歳くらいの男の子をつれて逃げ遅れてうろたえ、哀願する姿があった。ご主人が戦地に召集されたお隣の奥さんだという。姉はとっさにどこに持っていたか義兄の黒い兵古帯で坊やの体を自分の体にくくりつけ手をひいて「奥さん、大丈夫よ、行きましょう」とかけ出した。もうもうたる煙の中で私はむせながら、地面を這うように逃げた。私は

息苦しくなって、ぬかるみの泥水を手拭いに浸し、口にあてて吸うと不思議に呼吸が楽になった。どこをどう逃げたか煙からやっとぬけ出すと火の中を逃げまどう人々の群れの中に姉の姿を見つけた。「坊やは？」と聞くと「わたし達は反対の方に逃げます」と言って奥さんは向うへ逃げて行ったという。2階から沢山の本を運び出している黒い学生服姿、荷物を背負い我先にと逃げて行く被災者の姿が燃えさかる炎をバックに映し出されている。

姉は私を連れて都川の川べりに避難した。そこにはおびただしい避難民が防空頭布を被り、手荷物をかかえて土手に群がっていた。都川の川面には、たくさんの焼夷弾が燈籠流しのように流れていた。姉は敵の火だから消せと私に命令する。何も水の中にある火を消さなくてもと思いながらも途中の道にころがっていた鉄かぶと（当時はヘルメットをそうよんでいた）で川の水をすくって流れてくる焼夷弾の火をめがけては消し続けた。ものすごい数で1つ2つ消してもどうにもならないことはわかっていた。死を直前にしながら私には何故かその火がとても美しく見えたのは今でもわからない。

川向うの土手には、すっ裸で赤禪一つの男が狂人のように女の名を叫びながら走って行く。大八車に山ほど世帯道具を積んで運んでいる前かがみの男の姿、赤ん坊を背負い、老人の手をひいて夢中で逃げる女たちの姿等等、まっ赤にいろどられた千葉の空を背景に、まさしく地獄絵のシルエットのように眺められた。姉の指さす方向を見ると千葉大の旧館が爆撃され、仕掛花火のようにまっ赤な火の粉を散らし燃えおちるところだった。文字通り阿鼻叫喚の図とはこのことだろう。幾つ目かの焼夷弾の火を消そうとした時、ずるずると私の体は川へ滑り落ちた。「馬鹿！」姉の大喝一声に辛じて姉の手につかまって這い上った。敵機のグーングーンという腹の底に響くような不気味な爆音に「神様、仏様、私を守って下さい。死にませんように」と必死に祈ったものだった。土手つぶちの人々にならって私も伏せの姿勢をとった。姉は「ここは危いから、ほかへ逃げよう」と私に先立ってぐんぐん歩いた。途中、亀井橋の上に来たとき、下半身焼けただれ、開いた両足から鶏の黄色い脂身のような肉のはみ出た若い娘の死体がのけぞっていた。うつ伏せの人、芋のように転がっている人々の死体が散在し、思わず目をそむけた。でもその人達をまたがなければ逃げられない。姉は合掌して死体と死体の隙間をみつけて歩いて行く。私もこわごわそれにならった。たくさんの台所用品、家具も散乱している。私は何故かその時、戦国時代に死体から刀をぬきとって高く売る盗人の話を思い出し、ぞくぞくと身ぶるいがした。

当時、姉達の知合いで教育長をしておられた方の家が病院下であり、その家へとりあえず寄せて頂いた。奥さんが、泥だらけ、ずぶぬれの私達姉妹に熱いすいとうんをご馳走して下さい。急いだのかまだ生ま煮えの大根のかりかりした歯ごたえに「助かった」という実感と人の情けに涙があふれた。私たちの逃げた川べりには、あれから数分後に襲撃に合いたくさんの人達が亡くなったという。私達は九死に一生を得た思いだった。第2小（現在の本町小）のガード下に逃げた兵士や住民は黒こげになって発見されたという。

夜が明けると師範学校の教科書だけ入ったリュックを背負った私と同じくぬれそぼれて髪の毛が額にへばりついて青白い顔をした姉は、姉の婚家のある市原に向う線路（現在の内房線）をとぼとぼと歩きに歩いた。途中、民家の子ども達が私達のみじめな姿を見て、声を揃えて「焼け出されー、焼け出され！」と調子をつけてはやしたてた。しかし二人とももう怒る気力もなかった。

姉の婚家で一晩、死んだように眠ると翌日は早くからたたき起され、焼跡整理のため又線路づたいに千葉までの長い道を歩いた。市原に疎開していた姉の長男の小学生は姉に気合いを入れられながら私のリュックサックを背負ってくれたので大分助かった。

亀井町の家は跡形もなく、焼け焦げたバケツに骨だけになった鶏の哀れな姿があった。姉の鏡台も化粧水の瓶も飴のようにぐんにやりと曲っていた。前日、配給になった馬鈴薯が焼芋になって灰の中から出てきた。「焼たくあんはいかがあ」と義兄がおどけて茶色にこげたたくあんをぶら下げて見せたが、誰も笑わなかった。私が持って逃げるようになっていた大理石の置時計も吐き捨てられたガムのように焼けただれていた。焼けトタンで囲った片隅から煙がたちのぼり頭髮のこげるような異臭が漂ってくる。憲兵隊が死体に石油をかけて焼いているんだとだれかが言った。焼跡整理といっても残っているのは防火用水と書いたコンクリートの水槽だけだった。私達の生存を姉が焼けて炭になった木片で水槽の側面に書いた。実家の義兄があとで尋ねてきてそれを見てほっとしたという。

その後に又P51の来襲があり焼残った防空壕にもぐりこんだ。すると壕の中に配給された醤油が無事に一本残っていた。何か非常な貴重品を見る思いで瓶を撫でまわしたものだ。角のおすし屋さん一家も墨で作った人形のように黒こげだったと姉は言った。

町に出ると抜刀した軍服姿の将校が放心したように歩いていた。懐炉灰の燃えかすのような電柱、瓦れきとなった千葉の町は惨たんたる焦土と化した。姉は当時、院内小学校に勤務していたが子ども達に会う度に「がんばろうね、しっかりするんだよ！」と大声で励ましていた。これが教師の姿なのだと何か胸に燃えるものがあった。

あれから44年が夢のように過ぎ去り、あの情熱のかたまりのような姉もとうに70の坂をこし、私も教職を去って今年還暦を迎えた。千葉の町は、あの悪夢がうそのようにビルが建ち並び華やかによみがえった。人人は着飾り、食物はあふれ、ニューモードの若者達が闊歩する。私達の母校跡は、皆でお金を出し合って建てた「富士見校跡」と刻んだ石碑が建っている。千葉市のこの発展ぶりを戦火の犠牲となった人々の霊は、どのように見ていることだろう。